

ディスコグラフィー掲載

ディスコグラフィー【2023No.189】(HP 掲載)

分類：CD

作曲家：ジャン＝フィリップ・ラモー他

曲：優しい嘆き他

演奏：ジュスタン・テイラー

発売：ALPHA Classics

No. : :ALPHA721

概要：



[ジュスタン・テイラーチェンバロリサイタル](#)で求めてきた盤です。

収録情報は以下のとおりです。

【収録曲】

ジャン＝フィリップ・ラモー：

1. 優しい嘆き
2. 一つ目の巨人
3. ラ・ラモー (ジュスタン・テイラー編)

クロード・ラモー[1689-1761]：

4. ムニユエ・バロセー (バロス風メヌエット)

ジャン＝フィリップ・ラモー：

5. めんどり

ジャン＝フィリップ・ラモー／ジャン＝フランソワ・タプレ[c.1738-c.1819]：

6. 未開人

タプレ：

7. 『未開人』に基づく変奏曲

ジャン＝フィリップ・ラモー：

8. トリオレ

クロード＝フランソワ・ラモー[1727-1788]

9. ラ・フォルクレ

ジャン＝フィリップ・ラモー：

10. エジプト風

11. アルマンド ホ短調

ラザール・ラモー[1757-1794]：

12. 優美なロンド

13. 鳥のさえずり

14. アルマンド イ短調

15. クラント イ短調

16. サラバンド イ長調

17. ガヴォットとドゥーブル

クロード・ドビュッシー(1862-1918)

18. ラモーを讃えて - 『映像 第1集』より

【演奏】

ジュスタン・テイラー(クラヴサン/ピアノ)

【使用楽器】

クラヴサン(チェンバロ)：リヨンのドンズラグ 18世紀製オリジナル

ピアノ：パリのエラール 1891年製オリジナル

発売元のネット上の解説は次のとおりです。

「南仏の古城にあるスコット・ロスゆかりの銘器で、巨匠ラモーの知られざる一族の世界へ

2021年1月、新型コロナ感染拡大のなか隔離待機期間を経て来日ツアーを成功させ、フランスをはじめとするヨーロッパでの注目度の高さを裏書きしたクラヴサンの名手ジュスタン・テイラー。ブリュッヘ（ブリュージュ）国際古楽コンクールで成功をおさめ、「ALPHA」レーベルで着実にリリースするアルバムの多くがフランス内外でも高評価を博す新世代の俊才が、新たに世に問うアルバムは「ラモーの一族」。啓蒙主義思想家として知られるディドロの対話劇風論考「ラモーの甥」でも知られる通り、ラモーは一族にも音楽家が幾人かおりましたが、ここでは大御所ジャン＝フィリップ・ラモーのクラヴサン作品に加え、古典派時代にいたる一族の系譜をたどりながら彼らの作品も併せて収録しています。さらに、18世紀後半の重要な鍵盤音楽家タブレの作品や、19世紀末のピアノの銘器を使用してのドビュッシー作品をプログラムに編み込み、アルバムとしての面白さがひととき多層的に（解説は演奏者自身が執筆）。

クラヴサンは故スコット・ロスが愛奏したことで有名な南仏アサス城の18世紀の楽器。歴史的ピアノはパリのシテ・ド・ラ・ミュージクにある楽器博物館所蔵のオリジナル。惚れ惚れするような美音と空間の響きを「ALPHA」初期からの名技師ユーグ・デショーが鮮明に収録しており、テイラーの自然体から立ちのぼる音楽の味わいを空気感ともども伝えています。(輸入元情報)

収録曲は、ラモー一族のもので、貴重な音源です。

本CD再生は、EMT981から行いましたが、音質は仮想アースの助けもあって、使用されたチェンバロの機種や収録場所は、演奏会とは違ってはいますが、音量を演奏会の音量まで絞ると、まるで眼前で演奏しているかのような印象で、余韻も忠実に表現されており、演奏自体は演奏会の印象が再現されています。CDのチェンバロは18世紀のオリジナルであり、演奏会のチェンバロは、18世紀のフレンチモデルを模した日本製のように、オリジナルの方がおおらかに豊かな音が、日本製の方は細身の音がしていました。

最後のドビュッシーのラモーを讃えての演奏は、エラール1891年製オリジナルによる演奏であり、これも貴重な音源です。

なお、このCDはNAXOS扱いであり、NAXOSのサイトでTRAILERの試聴が可能です。

<https://ml.naxos.jp/album/ALPHA721>

以上